

日本SOD研究会報

特集 BOOK紹介

ウイルスにも
ガンにも
野菜スープの力

前田 浩著 (幻冬舎刊)

発行元 日本SOD研究会 宮城
住 所 〒158-0094
東京都世田谷区
玉川 1-15-2 B棟 2802
TEL. 03-5787-3498
協力：株式会社丹羽メディカル研究所
<http://www.niwa-medical.com>

新型コロナウイルスによって日本だけでなく世界中が大きく変わりました。こんなに医学が進歩しても、自動運転だAーだと科学が進歩しても、たったひとつのウイルスで世界中が大混乱に陥りました。しかもその解決策が、3密を避ける、ソーシャルディスタンス、マスク着用、不要不急の外出を控える、こまめな手洗い、うがいといったアナログなものばかりというのも驚きでした。特に、当初は専門家たちも、発症したら個々の免疫力に頼るしかないといっていました。実際、亡くなられたり、重症化の危険性があったのは、免疫力が低下している高齢者と、がん、糖尿病などの持病を抱えた方々が多かったと言われています。

「免疫力を高める」という発言により、スーパの棚から納豆やキムチなどの発酵食品が品切れになったといえます。

「免疫力を高める」これはコロナ禍だけではなく、すべての病に共通するワードではないでしょうか。

今回は、こんなときだからこそぜひ読んでほしい本『ウイルスにもガンにも野菜スープの力』を紹介いたします。著者の前田浩医学博士はハーバード大学がん研究所の研究員を経て熊本大学教授(現在名誉教授)大阪

大学や東北大学などの招へい教授などを歴任された方。経歴だけをなぞっていくと、西洋医学の王道を行く方なのですが、ハーバードと熊本大学で続けた研究のなかで、世界初といわれる副作用のない合成高分子をつないだタンパク質の抗がん剤「スマンクス」を開発したのです。この開発により、前田教授は、なんとオプジーボでノーベル賞を受賞した本庶教授と同じ時にノーベル賞候補にあげられていたのです。

これらの開発の過程で、「そもそもがんはなぜできるのか。がんと炎症の関係、ウイルスと炎症の関係、そしてこれらと大きく関わっている活性酸素の存在を知りました」

そもそも先生の専門は細菌学、微生物学、ウイルス学なのです。そのため最先端の研究を行っているアメリカに渡ったとか。ですから、

「細菌やウイルス感染でどうして病気が発生するのかという研究も続けていました。そのひとつがインフルエンザの感染症発現のメカニズムです。マウスにウイルスを感染させたとき、実はウイルスそのものの毒性よりも、活性酸素が肺炎などの発病の原因になることを発見したのです。ならば大量に発生した活性酸素がDNAを傷つけ、がん化の原因になるのでは

ないか、すなわち活性酸素を抑えることができれば、ウイルスにもがんにも打ち勝てるのではないかと考えました」

がん化に活性酸素が大きく関わっていることは、丹羽先生の長年の研究や論文発表でも明らかです。昨今では、がんだけでなく、老化やリウマチ、アルツハイマーなどの発症にも活性酸素が深く関わっていると言われています。さらにウイルスも関わっているというのは初めて聞くお話です。ただ、見方を変えれば、これはひとつの望みではないでしょうか。丹羽先生は著書や講演会などでも

「私が研究開発したSOD様作用食品などは、活性酸素を強力に抑える効果がある」と言っています。つまり、活性酸素をSODで抑えることができれば、がん細胞がでにくく、インフルエ

ンザや新型コロナウイルスによる肺炎も予防できるということかもしれません。では、どうして新型コロナウイルスなどに感染して重症化すると肺炎になるのか。前田先生は

「ウイルスが肺に侵入すると、そのウイルスを殺すために免疫をつかさどる白血球から大量の活性酸素が放出され、ウイルスは全滅します。ところが、大量に放出された活性酸素は行き場を失い、今度は肺の細胞を攻撃して炎症を起こし、発熱や肺炎に至ります。ウイルスは死に至る病

「ウイルスにもガンにも野菜スープの力」
前田 浩著 (幻冬舎)



『ウイルスにもガンにも野菜スープの力』
前田 浩著 (幻冬舎)

の引き金ではあります。直接の病

加熱した野菜こそ 抗酸化力を発揮

そこで前田先生は、活性酸素を抑える抗酸化作用のある物質探しを始めた。そしていろいろ試みた結果、野菜の持つ抗酸化力に着目したのである。と同時に野菜の持つ栄養素を吸収する力に着目しました。

「草花や野菜などの植物は、自然界の強い紫外線に晒され、カビや病原菌、害虫の攻撃も受けているのに、なぜがんにならないのか。それは自身の中に身を守る仕組みを整えたと考えられます。ファイトケミカルです。直訳すると植物性化学物質であり、細胞の中に含まれる成分であり、植物の色や香り、辛み、苦みなどの元となる機能性成分です」

ファイトケミカルというよく耳にするのがトマトのリコピン、お茶のカテキン、ニンジンなどのベータカロテン。これらには強い抗酸化力があると言われています。前田先生

いわく

「ファイトケミカルの強い抗酸化力はウイルスの侵入などで発生した活性酸素を中和、除去してくれるのです」

この本には、抗酸化力が高く、がんやウイルスの予防効果のある野菜が列記されています。例えば細胞の修復などを促進するのは緑色野菜、ほうれん草、小松菜、ニラ、大根の葉、人参の葉。肝がんの発生を抑えるのは野菜全般とシイタケ。ただし、これらはやみくもに摂ったからといって効果があるわけではないそうです。野菜はすべて加熱して食べることで効果があるとか。

どういふことかというところ、これまでの栄養学では食材の持つ栄養素を試験管の中でしか調べていなかったそうです。実際に人の体内に入って吸収されて初めてその栄養素の意味があるといえます。

「栄養学も大事ですが、もっと大事なのは人の体内でどうすればどれくらい効率よく吸収できるかという、吸収学なんです」

そこで前田先生が研究を重ねて得たのが、野菜を加熱することでした。「野菜の植物細胞は、細胞をくるむ膜とそれを丸ごとくるむ細胞壁の二重構造になっています。外側の壁は硬い構造物で、私たちが少々噛んだく

らいでは壊れません。ミキサーにかけてもなかなか壊れません。ところが、加熱するとすぐに破裂して、中の有効成分、ファイトケミカルが外に出てきます。つまり、野菜の栄養成分を吸収するには煮る、炒める、蒸すなどの加熱によって細胞壁を壊してから食べることが大切なのです」

加熱するとビタミンが壊れてしまいうから、野菜は生で食べたほうがいい、と言われていたのは、試験管の中の実験で得たもので、実際の吸収とは異なったようです。

「生では野菜の有効成分の90%が細胞の外に出てこないから、吸収されないんです」

実際にじゃがいもを30分加熱したところ、60%ものビタミンCが残っていたそうです。

「実験室の結果やデータだけで作られた誤った情報が伝わっているということを私たち研究者は知らなくてはならない。私がハーバードで学んでいた頃、生理学の教授は、今日の医学の教科書の内容の半分は間違っているか、想像によるもので、諸君の使命はその誤りを正し、新しい知見を発見することです、と聞いていました。一方日本では、教科書の手順を100%守ることが医師の使命と教えていました」

化学の世界は日々進化して、昨日までの常識が明日は常識になるかもしれない。以前、取材させていただいた糖尿病の治療で著名な牧田善二先生も、今や糖尿病の治療は力ロリー計算ではなく、血糖値をコントロールする糖質制限があたりまえだとおっしゃいます。しかし、

「いまだに日本糖尿病学会は糖尿病の食事は力ロリー制限が大事と言っているんですから、間違っている。昔は運動中は水を飲むと疲れやすくなるから飲むと言っていた。今そんなことしたら脱水症状でみんな倒れてしまいます。巷の健康法も間違いがいっぱい」と言っていました。

前田先生のアプローチとは方法等、いろいろ違いはありますが、丹羽先生の生薬やSODも、基本は食物の持つ高い抗酸化力に注目したところから開発されました。丹羽先生いわく

「天然の植物の中には抗酸化物質、抗腫瘍物質が非活性型で存在しています。それを人間や動物が食べて、強力な唾液や胃液で活性型にしていたけれど、現代人の胃液や唾液にはその力がなくなっていました」

そこで天然の生薬、植物種子を吸収できるようにするために丹羽先生

は、遠赤外線焙煎、麹発酵、油剤化という工程を経て吸収できる活性型にしたのです。

病気の元は増えすぎた活性酸素。それを除去するのは野菜などのファイトケミカル。それも効率的に吸収できるようにしたものではない。前田先生も丹羽先生も同じ原理でした。

余った野菜を30分煮る 冷凍保存もできて手軽

さて、最後に、前田先生お勧め、野菜スープの作り方を紹介します。

多種類の野菜を使うことがコツで、よく使う野菜は、玉ねぎ、にんじん、キャベツ、かぼちゃ、セロリやブロッ



コリーなど。食べやすく切るか、ミキサーで碎ける大きさにして、これらにほうれん草や小松菜なども一種類入れ、2〜3リットルの水で30分から1時間煮る。たったのこれだけです。

「塩分は控えめにしたいので、基本的には味付けはしません」

野菜のうまみだけでも十分美味しいとか。ときには味噌や岩塩、だし醤油を入れるとなお美味しいでしょう。また、オリーブオイルやコンソメを入れて洋風にしてもいいそうです。前田家ではこれをミキサーにかけ、ポタージュのようにして冷水ポットに移して冷蔵庫で保存し、毎日マグカップ一杯を温めて飲むとか。ポタージュにして冷凍もしておけるから、毎日作る手間もなく、お手軽に常備スープになります。

「余った野菜やキノコなど、なんでもいいんです。それにターメリックなどを入れてカレーにすると、抗がん効果や抗炎症効果もあります」

考えてみれば、野菜スープという名でなくても、シチュー、ポトフ、ボルシチ、ブイヤベースなど世界中に野菜などの煮込み料理が昔からあったわけです。日本の鍋料理も、残ったスープにご飯やうどんを入れてしめて食べることも野菜のファイ

トケミカルを取り入れていることになりません。

この本には、野菜スープだけでなく、炒め物などの健康調理法レシピも豊富に載っています。また後半では、がんと食生活についての話や、グローバルな時代の新しい健康常識についても書かれていて、読んでいくうちに本当に健康な食生活とは何かが分かってきます。

前田先生は、他にも冒頭に先生のプロフィールとして紹介した、がんの研究による「副作用のない抗がん剤の誕生。がん治療革命」(文芸春秋社刊)という本の中でも詳しく紹介されています。現在、先生のいらっしゃる熊本大学には、世界中からがん患者さんが訪れるといいます。先生は言います。

「がんの発生から治療にいたるまでの問題には原因がひとつではなく数多くあり、また、結果が複数の結果を引き起こす複数形の世界なのです」



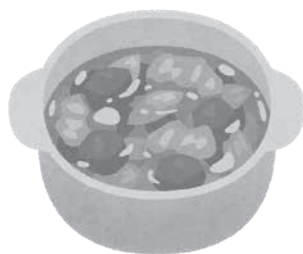
「副作用のない抗がん剤の誕生。がん治療革命」
奥野修司著 (文芸春秋社刊)

つまり、昨日今日、何かはつきりわかる原因でがんになるのではなく、長年の生活習慣やストレス、持病等が複雑に混じりあってがんになると。その治療法も一か所のがんを叩いて、それだけで解決にならないことが多いとか。

莫大な研究費を注いで、莫大な健康保険補助を使い、結果未だにがんで亡くなる患者さんの数は減らない。

「薬剤の認可は100年前の原則にとらわれていて評価され、ことごとく失敗している。新薬開発にはもっと多面的で多次元的な考え方をしないといけない。抗がん治療がまだ前進しない理由の一つかもしれない」

本の中には、70歳を過ぎたらがんの化学治療はしないほうが長生きをする。抗がん剤のプロの私が、がんの予防を訴える理由。植物由来の食品成分の有効性と可能性。といった項目もあり、単なる野菜スープ一杯が、驚きの展開を示してくれます。



SOD愛飲者 インタビュー

網膜浮腫と膠原病 ふたつの難病が SODの有難みを教えてくれた

岐阜県にお住まいの三沢鈴さん (77歳)

今回インタビューさせていただいた三沢さんは、SOD歴10年というベテランです。本来は岐阜まで出向いて、直接お会いしてお話を伺いたかったのですが、新型コロナウイルスで外出を控え、人との対面での会話などもつてのほか、というときでしたから、やむなく電話インタビューをさせていただきました。

「そこが痛いとか、だるい、寝られない、食欲がないというお話ばかり。だいたい病院で何かしらの薬はいただいています」

みなさんよくおっしゃるのは、同窓会などで、40代に入ると健康食品やサプリの話。50代で親の介護の話。60代からは自身の持病や病院の話ばかり。一億総健康志向。三沢さんもしかりでした。

はきはきとした口調、張りのある声からも、お元氣なのが伝わってくる三沢さん。御年77歳にはとても思えません。さすが10年SODを愛飲されているだけあります。その三沢さんが飲み始めたきっかけは、60代も中盤にさしかかり、健康を維持したい、老後の大病を避けたいという想いからでした。

「私たちくらいの年齢になると誰でも思いますよね。まわりでも、ど

「私も、遺伝的に高血圧ですから、降圧剤のお薬は50代から飲んでいましたし、健康に関することは何にでも興味がありますね。だからSODのこともずいぶん前から知っていましたよ。確か、お友達からパンフレットのようなSODと書かれた冊子をいただいて、それを読んで、これはいいものかもしれないって。だって化学的なものが一個も入っていないでしょ? それでいて血流が良くなって、活性酸素と

いう病気の元になる悪いものを取り除いてくれるわけでしょ？安心安全だと思ったんです」

健康維持のために最初は一日に1〜2包くらいを飲んでいたという三沢さん。

「当時は高血圧以外に病院にいくようなことは何もなかったですから、SODが効果があったのかどうかは分からなかったと思います。有難さというのは、どこかに不具合がないと分からないですよ」

注射の効果は 数か月だけだったのが SODで浮腫が 出なくなった

そんな三沢さんに異変が起こったのは、今から(2020年)5、6年前のことでした。

「急に右目だけが見えにくくなったんです。私、昔から視力は良くて、1.0〜1.5くらいはあるんですが、このときは0.3まで落ちたんです。近くの病院で診察してもらったら、どうも目の奥に腫れものがあるみたいだから、大きな病院できちんと検査してもらったほうがいいといわれ、県でいちばん大きい病院の眼科で診察してもらったん

です。そしたら、網膜浮腫と言われたんです」

網膜浮腫とは、どのようなものかというところ、(以下、厚生労働省糖尿病情報センターHPより)網膜には、物を見るために重要な役割を果たしている黄斑という場所があり、この黄斑に障害が起こり、視力が大きく低下するそうです。黄斑浮腫は、黄斑部分がむくんでいる状態で、眼の血管に出血があったり、毛細血管が詰まって、血管に瘤(こぶ)などができたりすると、血液中の成分がしみ出し、起こるむくみが浮腫といわれます。通常、黄斑浮腫といわれ、糖尿病の合併症でおこることがほとんどとか。しかし、三沢さんは糖尿病ではありませんでした。

「原因はわからないんですが、年寄りに起こる病気だと言われ、いよいよ私も、いろんな病気になる歳になったんだなと実感しました」

そして医師から勧められた治療法が抗VEGF抗体(抗血管新生薬)の注射でした。この注射は、浮腫の原因であるVEGFという血管内皮増殖因子の働きを抑える作用を持ち、それにより症状を抑える効果があるとか。ただし、一度障害を受けた組織は再生しないた

め、元通りの視力は望めないそうです。しかし、放置しておくとう失明の危険性もあるので、注射で抑える必要があるそうです。

「先生からは、元には戻らないけれど、少しは良くなるし、注射をしないともっと悪くなると言われ、注射の治療を1年以上続けたんです。注射をしたらうとしばらくは視力が良くなるんです。でも、3か月もすると元に戻って、また注射をすると少しは回復する、といった繰り返しでした。このままでは3か月に一度の注射を一生続けなきゃいけないのかと思っただけです。一生回復しないんだって」

そんなときに定期的に届くSODの会報のなかの愛飲者の記事を読み出したのです。

「がんだけでなく、いろんな病気の方のお話が、頭の中を巡り、SODを多めに飲んだら、ラクになった、良くなった、という話を思い出したんです。ダメ元でもいいから、しばらくSODを多めに飲んでみよう」と

これまで1、2包、それも毎日ではなかったSODを、毎日5包ずつ飲み始めたのです。そうして3か月後。いつものように注射のた

めの検査をしに病院に行きました。

「3か月すると注射の効果もなくなり、浮腫ができ、視力も落ちていくところだったのですが、この日は、浮腫もなく視力も0.7くらいで収まっていたんです。私も驚きましたが、先生がいちばん驚いていました」

このとき三沢さんはピンときていました。

「これはSOD効果だ」

先生に、何か特別なことをしましたか？ と聞かれましたが、SODの説明がうまくできないし、信じてもらえないだろうから、

「何もしていません」

と言っしかなかったそうです。SODあるあるがここでも発生。

「正直、こんなに早く効果が出るとは思っていませんでした。SODの有難さは病気になってみないとわからないと身にしみて感じました」

以来、SODは毎日欠かさず4包から5包飲むようになった三沢さん。

「あれから浮腫はまったく出ていないですよ。ええ、毎月検査をしてもらっていますから、間違いな

一生ステロイド漬けの 膠原病もSODで ステロイド離脱

それから数年後。新たな異変が三沢さんの身体を襲いました。

「3年くらい前に、今度は足が腫れてきたんです。足先からふくらはぎあたりまでむくんでいるような、瘤のような腫れができて、そのうちに熱っぽくなって、これはおかしいと思い、病院に行っていたら、いろいろ診てもらったら、血液検査でCRPという数値が異常に高いと言われたんです。先生も驚くくらい。これは大きな病院で診てもらったほうがいいというので、また岐阜県でいちばん大きな病院に行って検査をしたんです。そうしたら膠原病で、リウマチ性菌膜炎という、これまで聞いたこともない病気の名前を言われたんです」

このとき三沢さんが血液検査で数値が高かったというCRPというのは、(日本衛生検査所協会HP参照)体内に炎症が起きたり、組織の一部が壊れたりした場合、血液中に蛋白質の一種であるC-リアクティブ・プロテイン＝CRPが現われるとか。このCRPは、正常な血液のなかにはごく少ししか

見られないため、炎症があるのかなかを診断するのにこの検査が行われます。陽性反応が強い場合は、結核などの感染症、膠原病、リウマチ熱、心筋梗塞、肝硬変、敗血症、悪性腫瘍などの疑いがあるそうです。

規定値は^{0.25}以下となっていますが、このときの三沢さんは20mg/dl(ミリグラムデシリットル)もあったそうです。規定値の約100倍もあったということです。余談ですが、新型コロナウイルスの検査として使用されているのはPCR検査。見間違えそうですが、全くの別物です。

そして三沢さんにとっては聞き慣れない膠原病という病名。これは丹羽先生が、がん、アトピー性皮膚炎と共に最も専門とする難病の一種です。ここからは丹羽先生の著書より膠原病について説明します。

膠原病は、別名『自己免疫疾患』といい、約20数種類の病気があります。発病原因は、人間の身体の中には膠原組織と言う組織が皮膚と筋肉、骨の間に張りめぐらされており、この膠原組織のどこかが障害を受けるため、膠原病と言う病名がつけられたのです。一般に、

人間の血液の中には、カビ、ばい菌、ウイルスが体内に侵入した時、これを叩いて自分の身体をそれらの侵入から守るリンパ球という大事な細胞があります。このリンパ球はカビ、ばい菌、ウイルスの侵入に際し、抗体を作ったり、それらがとりついている細胞を破壊したりして、攻撃します。この大切な血液中のリンパ球が、何を狂ったか自分の(膠原)組織をカビ、ばい菌、ウイルスと間違えて、つぶしにかかるわけです。そしてこのつぶされる膠原組織の場所によって病名が決まり、関節がやられるとリウマチ、甲状腺がやられると橋本病、唾液・涙腺だとシェーグレン症候群、また、筋肉だと皮膚筋炎、広く血液、腎臓や肺がやられるとSLE(全身性エリテマトーデス)となるわけです。

治療は今のところ西洋医学ではステロイドの投与が一般的です。しかし、ステロイドと聞くと、昨今の薬害、副作用の害といった報道などでハナから拒絶される人も多いと聞きます。三沢さんも、医師から膠原病の治療にはステロイドしかないと言われ、やむなく服用したそうです。

「やはりステロイドは抵抗ありまし

たよ。抗がん剤とステロイドは良くないって、いろんな人が言っているから。でも、ステロイドを飲まなかったら、腫れも引かないし、痛みもなくならない。まずは腫れを引かせないといけないと言われ、飲み始めたんです」

丹羽先生もステロイドについては

「ステロイドは決して病気を治すための薬ではありません。病状を抑えているだけです。その抑える力は抜群です。痛み、腫れ、熱、痒み、ブツブツなど何でもドンピシャリと抑えてくれます。しかし、決して病気を治しているのではありません。従って、治る病気、例えば、山に行って「ハゼ」にかぶれて顔が腫れ目が開かなくなった時、これはハゼの木の下に行かないと二度とこのようなことは起こりませんので、かなりの量のステロイドを点滴の中に入れて注射すると、数分で腫れがとれて目が見えるようになる非常にありがたい薬です。薬害反対の先生方がステロイドを非難されますが、このような患者さんには是非使っていた方がいいと思います。これは西洋医学が得た科学の恩恵であります。ところが、治らない病気、何十年

も続く病氣、例えば、膠原病、アトピー性皮膚炎、喘息などです。ステロイドを使えば、抑える力が抜群です。症状が収まって楽になります。しかし、減量したり中止すると、必ず再発します。そしてまた使用します。ステロイドは短期間ですとそれほど問題はありませんが、特に全身に長期間使用すると、副作用が強く出てきます。まず、糖尿病、白内障、緑内障、胃潰瘍で血を吐き、5年、10年、15年使っていると骨や筋肉がボロボロになってきます。ですから、「ハゼ」にかぶれたような完治する病氣なら使ってよいのですが、膠原病、喘息、アトピーに使うと、止められなくなって、そのうち副作用が出て来て最後は骨や筋肉がボロボロになってしまふ。また、もう一つステロイドの弊害は、治療を中止すると悪くなり(前門の虎)、続けていると副作用が出る(後門の狼)。それに加えてもう一つ、副作用が恐いからと言って急に中断すると病氣が悪くなると同時に、麻薬同様あるいは麻薬より強い『禁断症状』が出ます。この禁断症状は、食欲不振、嘔気、嘔吐、頭重、不快感、脱力感、さらには呼吸困難などがあります。

使うにしてもやめるにしても、非常に危険だということでしょう。なので三沢さんも、

「まずは症状を抑えないといけない」と思い、医者の指示通りステロイド治療を始めました。ステロイドと聞いてちょっと不安はありましたが、でも、SODと併用して飲めば副作用も少なくなるんじゃないかと思っただけです」

そして3か月後、検査の結果、CRPの数値がいきなり0.05にまで下がったのです。規定値をも大きく下回る数値にまたしても先生が驚かれたそうです。

「ステロイド以外に何かやりました? すごくいいですね、こんなに簡単に数値が下がる病氣じゃないんです、免疫力があるんですねって言われました。この数値でちょっと自信がついたというか、安心できました。だって私にはSODという強い味方があるんですから」

その後、少しずつステロイドの量を減らしていきましたが、数値は規定値内のままで今日まできているそうです。

「今後何かあれば、SODを多めに飲めば大丈夫。だって、SODはいわゆる副作用のある薬じゃなく、食品ですからどれだけ飲んで

も大丈夫ですよ。今となつては飲まないと気が済まなくなっています」

SOD依存症かしら、といって朗らかに笑って答えてくださった三沢さん。こんなご自身の体験を、ご近所のお友達にも話し、SOD仲間を増やしているそうです。

「だって、人から聞いた話じゃなくて実体験ですよ」



SOD様作用食品 体験者の声を お聞かせ下さい。

難病で苦しむ方たちが、少しでも早く良い治療法に行き当たるように、本誌では愛飲者の声を募集しています。お手数ですが、

〒158-0094 東京都 世田谷区
玉川1-15-2 B棟2802
日本SOD研究会 宮城宛
TEL 03-5787-3498
までご一報下さい。

もしくは

日本SOD研究会
☎ 03(5787)3498
まで お電話ください。

◆丹羽先生診察ご希望の方は
御紹介、御予約いたします。
※自由診療となります。
丹羽メディカル研究所
☎ 0120(731)175

●SOD様作用食品とは● 丹羽博士の開発

SODとは、スーパーオキシド・デイスムターゼの頭文字をとったもので「活性酸素」を取り除く「酵素」のことです。

最近、健康の力ぎを握る物質として「活性酸素」と「SOD」の働きと役割がクローズアップされてきました。そして、活性酸素が体内に増加すると、がんや生活習慣病など、さまざまな疾病を引き起こすことが明らかになってきました。

体内に活性酸素が増えても、本来、人間や動物には余分な活性酸素を取り除くSODという酵素が存在していて、病気を防ぎ、身体の健康を守ってくれます。ところが、現代社会の弊害（公害、薬害、食品添加物の害）などが、活性酸素を暴走させていて、体内のSODだけでは追いつかなくなっています。

しかし、残念なことにSODという酵素は分子量が大きいために内服しても胃で破壊され、腸から吸収されませんでした。それを、内服できるように研究されたのが丹羽SOD様作用食品です。

開発した丹羽朝負（耕三）医学博士は、京都大学医学部を卒業し、医学博士として数々の研究が注目を集めていたときにご子息を白血病で亡くされ、それをキッカケにSODの研究を始めました。副作用がまったくないがん治療薬、がテーマでした。開発には実に



二十年もの歳月が必要でした。

「活性酸素をはじめとする免疫学の研究を通して私が知った、自然の摂理」は、私に大自然のメカニズムの精微さと人間の自己治癒力の偉大さを教えてくれました。病気は自分が治すもの、私は、この理想を患者さんの誰もが実現できるように医師の立場から最大限の努力を続けています」

先生は今も、土佐丹羽クリニック院長として、毎日、医療の現場でがん、アトピー、膠原病などの難病に苦しむ患者さん達の治療にあたっています。また、SODなどを始めとする論文は海外でも高い評価を得、日本のみならず海外の学会で講演をしたり、大学病院で特別講演をしたりと、多忙な日々を送っています。

幸いなことに最近、西洋医療と東洋医療などを統合した医療へと世の中の流れが向かっています。代替医療に対する関心や認識も高まり、丹羽博士が40年も前から言っていた、本当の意味での人を診る診療の時代です。

この会報は、そんな丹羽博士の志を受け、誰もが自分の力で健康でいられるように、難病で苦しむ方が少しでもなくなるようにとの願いを込めたものです。

SOD研究会からのお知らせ

いつもSOD研究会報をご覧いただきありがとうございます。

最近、特に当研究会へお問い合わせいただくことが多い内容についてお知らせ致します。

「丹羽耕三博士のSOD様食品は金の笠のシールが貼られていれば、どこも同じものなのではないか？」というような、ご質問をよくいただきます。

その回答としましては、金の笠（管理番号付）シールは丹羽免疫研究所で分析・検定し、エーパック・ニワ加工工場（土佐清水市）で開発当初から、厳しい品質管理のもとに伝統的な製法で造られる製品だけに貼付される信頼の証（マーク）でした。しかし、ここ数年前より丹羽先生の考えで別の工場で製造されたSOD様食品にも金の笠のシールが貼られ、販売されているものもあります。土佐清水市の工場で製造されたか、そうでないかを見比べる一つの目安が、まず金の笠シールの特徴にあります。

エーパック・ニワ加工工場（土佐清水市）で製造されている製品シールの特徴



原寸大 横 30mm、縦 25mm

- 管理番号は6桁
※土佐清水で製造された証明の通し番号となっています。
- シール左部分に絵や記号が記載されている
※左部分の表示は製品管理の為、不定期に変わります。
- 他の工場で製造された製品と比べ、原末の味や色、粒の大きさが違う場合などがある